

備蓄は良いですね。ただ高層階の場合、飲み水だけでなくトイレやお風呂など水が出なくなることも考えておく必要があります。阪神大震災の後しばらくは翌日までお風呂のお水を落とさなかった家は何軒もありました。断水時のトイレ対策というわけです。

以来30年にわたって役には立っていませんが、災害は安心して対策を怠ったところにやってくるものです。自宅が凹地に位置している平屋、あるいは土砂災害の危険地域にあるのであればおうち避難は現実的ではありません。持ち出せるように避難袋を用意し、避難所までの経路を確認してどのタイミングで避難するかあらかじめ決めておくのがよいとおもいます。緊急時の判断は難しいですが、あらかじめ熟慮してきめた自分マニュアルに従うことは少しハードルが低いです。

災害対策は平時に落ち着いて考えておくのが良いです。仲間や近所の人たちとできるだけコミュニケーションをとっておくのも大切な対策の一つだと考えます。できるだけ楽しく仲間を増やして、一人も取り残さない社会をつくりましょう。



災害対策と、共生社会実現への繋がりについて

笛吹市社会福祉協議会 事務局次長兼障害者地域支援センターふえふき所長 鈴木 勝利

笛吹市社会福祉協議会・支援センターふえふきでは、東北の震災でのエピソードを基に、平成24年から住民が障がい者を助ける「障がい者が地域の防災訓練に参加する試み」を実施。市や自立支援協議会当事者家族部会、社協地域福祉課と共同で行ってきた。これは笛吹市内の旧町村単位で精神、身体、知的、高齢と障がいの世帯などテーマを変えながら各地を回り、実施したもので、後に、その時の映像を用いて未実施地区でも啓発活動を行った。しかし、実際の地域では障がい者どころか、災害弱者とされる方々の殆どは地域の繋がりも無いことが目立つ。そんなことから、当事業は全ての地区でウエルカムということではなかった。例えば認知症の母親と知的障害の娘さんのふたり暮らしのケース。日頃地域住民から「この家庭が心配だ」という声はあったものの、いざ避難訓練に参加してもらうとなると、「けがをさせてしまうかもしれない不安」といった反対の声があがる。

電動車いすの小学生が対象となった時は、歩いて10分で行ける避難所までの道のりを、ブロック塀や用水路、通行する車などを避けるように通行すると1時間ほどかかることが分かった。また、避難所である体育館では、「入口に靴がたくさんあると車いすがそのままは入れない」と住民が靴を整理してくれていた。



地区によっては高齢化のため、役員は、別の所で住居する子どもが担っているなど、環境がそれぞれ違うこともあり、実施までの調整は色々な苦労があった。でも、「これは必要な事だね」という危機意識を改めて持っていただけるきっかけとなった。誰でも、自分の住んでいる地区からは災害による死傷者は出たくないという思いは持っている。最初は障がい者を救済することに対して消極的だった地域でも、実施後は改めて地域の中に障がい者がいる事や、対応方法などを皆で学ぶ中で、今後も継続していきたいという声も上がった。

しかし、障がい者は「助けられるだけの存在」なのか。「共生社会」とは、地域の皆さんが互いに支え合って生きていくこと。つまり、障がい者でも「助けられる存在」だけではなく「助ける存在」になることは出来ないのだろうかという思いも出てきた。

2020年。コロナウイルス騒動が始まった。各地では防災訓練が中止となっていった。

また、各地での震災などの様子から、当日の避難だけが課題ではなく、復旧するまでの長い期間を含めた対応が必要だと分かってきた。特に避難所では慣れない集団生活や、そもそも避難所に入れない精神・知的・発達障害などの課題も出ており、孤立や精神面での二次障害も増えている実情がある。

そこで、障がい当事者が防災ボランティアとして活動をするを通じ、障がい者でも地域の方々と協働しながら活動を行うことで、孤立化を防ぎ、地域の為に活動が出来るのではないかと考えた。被災地での役割を見つけ、出来る範囲での活動を通じて共生社会と出来ないかということである。

2021年、山梨県地震防災訓練・防災ボランティア設置訓練に2名の障がいの方に参加を呼びかけた。1名は精神障害の方、もう一人は片麻痺で高次脳機能障害の方である。避難所でのボランティア活動を想定した訓練であるので、参加してくるのは一般のボランティアである。結果この2名は自分に与えられたボランティアとしての仕事を、他のボランティアの協力を得ながら成し遂げることが出来た。



後日の反省会。参加した2名からは、「どんなことに気をつけたらいいか最初から分かったらもっとよかった。」「ボランティアを含め協働する方々がどの程度、障がいへの理解があるのか、まずお互いを知ることが大事だと思う。」などの意見が出た。またボランティアセンター担当からは「障がい者の方にも協力してもらいながら取り組んでいきたい。障がいがある方にしかできないこともある。」など、前向きな意見が出た。

2023年には、更に取り組みを変えて防災訓練を開始。市内に新しくできた障がい者グループホームの利用者が地域の避難訓練に参加する計画を立てた。地区に馴染もうとするホームと協働し、地区役員と話し合いを行った。残念なことに当日の訓練は台風の接近により中止に。しかし、地区との話し合いを重ねる中でグループホームの住人たちが避難所の運営も手伝えるということが分かり、小さな共生社会構築のきっかけとなることが出来た。

このように障がい者や高齢者という災害弱者一括りの対応ではなく、出来る人が出来ることを出来るだけ担うということで、災害時での共生社会実現の投げかけを目指している。



災いの先の未来へ

俳優（障害者の主張大会司会担当）菅野 結花

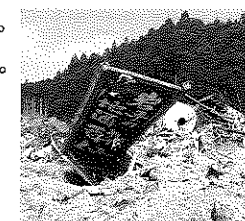
「起きてしまったことは辛く、悲しいけれど、それは必ずしも不幸ではない」

私のことを心配して食事に連れ出してくれた恩師が、涙を浮かべながらそう言った。自分自身に言っているようにも聞こえた。その人は戦災孤児だった。

大学進学で親元を離れ、2年が過ぎた二十歳の春。初の一人暮らしや甲府の地にも慣れ、県立大の学友や師にも恵まれ、人並みに悩むことはあれど平穏で順調な毎日だった。新年度からは就職活動が待っている。「きっとどこかには普通に就職して、もしかしたら誰かといつか結婚なんかして、これからも平凡な日常が続いていくのだろうー」

そんなことをぼんやり思い描く、どこにでもいる女子大生だった。2011年3月11日、生まれ育った故郷を一瞬で津波に流されるまでは。

凄惨なニュース映像の右上にどうして「陸前高田市」のテロップがあるのだろう。自分の目を疑った。実家すぐそばの酒造会社の見慣れた看板が、濁流に呑みこまれていく。どうやら確実に実家は流された。家族は、地元の友人は、恩師は、無事なのか。誰とも連絡がつかない。テレビ、ラジオ、SNS、インターネットの掲示板、あらゆる媒体から安否情報を集める。家族の無事が分かったのは3日ほどしてからのことだ。それまでは部屋に籠りきりで、寝ても覚めても悪夢を見ているようだった。



実家のすぐそばにあった酒造会社の看板
(2011年3月28日撮影)

友人、恩師、愛犬、実家…多すぎるものを失った。それはまさに「災い」だった。

地震や台風、火山噴火。災いの発生そのものは、人の力では防ぐことができない。「いつか」必ず起きるものだ。そして、「いつか」と考えてはいけなかった。物理的にも、心理的にも、何の備えもないまま、私は14年前、東日本大震災を迎えた。一番の後悔は、会えるチャンスがあったのに、会いに行かなかった友人のこと。「年末年始に帰省するから会えたら」と電話をくれたのに、「成人式のタイミングで帰省するからごめんね。また今度」と断った。その電話が最後になった。